

第 4 表 東部種西部種3月播種分発芽成績

種子区分	貯蔵区分	播種月日	発芽開始月日	発芽締切月日	発芽締切日数	発芽率	発芽本数	摘 要
西部種	土中埋蔵	3.15	5.7	7.2	100	91.1	11,870	昭27.12.種子入手
東部種花蓮港Ⅰ	冷蔵庫	3.8	5.8	7.14	129	15.4	9,235	昭27.9.種子入手
玉里Ⅱ	土中埋蔵	3.23	5.7	6.25	95	12.7	310	昭28.1.種子入手
台東Ⅲ	土中埋蔵	3.25	5.23	6.25	93	4.4	233	昭28.1.種子入手
大宇Ⅳ	土中埋蔵	3.9	5.22	6.24	108	1.1	283	昭28.1.種子入手

以上の結果より考察すると8~9月採種する東部種は直播するのが適当で翌年3月迄貯蔵する事は一応不適當である様に思考される。

2. 東部種芳しよの移植

9月温室温床に播種した苗木は3月に移植を行い又3月播種した苗は6月~7月に移植を行った。移植本数並びに活着状況は第5表の通りである。

第 5 表 東部種芳しよの移植成績

区 分	移植本数	活着本数	活着率	調査月日
3月移植温室9月の分	6,184	5,350	86.5	5.19
3月移植温床9月の分	5,824	5,711	98.1	5.19
6~7月移植3月播種分	10,061	8,161	81.1	10.13
計	22,069	19,225		

上表に依ると温室温床の二区で活着率に10%程度の差があるこれは温室内の苗は徒長した感があつたためと思われる。又移植するに当つては着葉3~4枚程度が一番移植成績が良好な様に感ぜられる。

3. 成 育 状 況

10月現在の生長量は第6表の通りである。

6表に依ると西部種は内地くすに比較して優秀な生育をなすが、東部種は内地くすに比し劣つているこれが今後西部種と異つた生育状態を示すならば栽培面に於て東部、西部区別して検討する必要が生じて来ると思われる。

第 6 表 芳しよの生長量 (10月現在)

区 分	樹高 cm	内地くすに對する比	根径 mm	内地くすに對する比
東部種9月播種3月移植分	85.5	248	9.60	165
東部種 3月播種分	26.4	77	5.21	89
西部種 3月播種分	57.2	166	7.81	134
内地くす 3月播種分	34.5	100	5.83	100

4. 主精油成分に依る苗木の鑑別

含有主成分に依つて苗木を鑑別する作業を概ね終了したのでその出現度を示せば第7表の通りである。

第 7 表 品種鑑別成績 (出現度)

含有主成分	東部種芳しよ	西部種芳しよ
リナロール	37.29%	50.48%
セスキテルペン	22.80	7.82
サフロール	2.42	1.31
シネオール	9.70	1.54
しよ脳	27.40	38.57
ボルネオール	—	0.04
未定	0.39	0.24

結 び

以上栽培試験と台湾より輸入された種子の育苗経過に就いて御報告致しましたが、その後も種子が輸入され、又栽培試験も引続き実施致しておりますので、それ等に就いては今後御報告致し度いと思ひます。

くすの幼時における生長促進試験

日本専売公社しよ脳試験場 森 太 三 郎・深 田 登

1. 緒 言

くすの苗木を林地に植付後雑草の刈拂苗木の周囲の鍬入れ林地の耕作及び施肥等時期によつて生長にどんな違いが現われるかを調べるため昭和26年度より実

施した。

2. 試験の方法

植栽場所 鹿児島市坂元町試験場常安林地

地 況 方位西南、傾斜急斜、湿度潤、深度浅中、

土壤砂質壤土粗密度一畝

植栽面積 0.8畝, 植栽月日昭和26年3月

A 施肥試験

- 1, 元肥区 (イ) 硫酸アンモニヤ10匁過磷酸石灰5匁併用区
(ロ) 骨粉15匁, 木灰10匁併用区
- 2, 追肥区 硫酸アンモニヤ10匁過磷酸石灰5匁併用
- 3 元肥追肥区 元肥区と同じく(イ)(ロ)に分け, 追肥として追肥区と同様のものを施した.
- 4, 対照区 無肥料(施肥しないもの)

B 鋤入れ試験

- 1, 1回区 (イ) 植付け年の7月施行
(ロ) 翌年の3月施行
2. 毎年施行区 毎年1回7月実施
3. 対照区 鋤入を行わない.

C 刈拂試験

全刈区條刈区に分け各々年1回, 2回, 3回, 区とし1回区毎年7月上旬, 2回区毎年6月下旬, 8月下旬9月上旬, 3回区毎年5月上旬, 7月上旬, 9月上旬刈拂を行つた.

- D 間作試験 1 農作物の間作を毎年実施区,
2 対照区. 間作を行なわない.

E 林地の高低による差異試験

林地の高低に応じ頂上部, 中腹部, 下部とした.

3. 調査方法

各試験区について植栽後1年目に活着成績を調査すると共に毎年2回(3月, 7月)高さ枝張り根径の測定を行つた.

4. 成績

A 施肥試験

施肥試験の成績は第1表の通りであつて施肥区の活着が良好とはいえない却つて元肥(硫酸, 過石)区は活着率が低い. 施肥区の生長は總体的に良好であつて特に枝張りが増大している.

第 1 表

対 照 区					
植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
121本	118本	98%	65cm	47cm	13.9mm
元 肥 (硫 酸 , 過 石) 区					
植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
183本	102本	56%	74cm	57cm	16.2mm

元肥(硫酸, 過石)追肥(硫酸, 過石)区

植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
146本	125本	86%	86cm	80cm	20.0mm

元肥(骨粉, 木灰)区

植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
252本	240本	95%	79cm	70cm	18.8mm

元肥(骨粉, 木灰)追肥(硫酸, 過石)区

植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
59本	57本	97%	85cm	78cm	20.9mm

追肥(硫酸, 過石)区

植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
125本	120本	96%	77cm	75cm	18.3mm

B 鋤入れ試験

鋤入れの時期回所に於いても活着には影響なく生長も左右されていないその結果は第2表の通りである.

第 2 表

対 照 区					
植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
121本	118本	98%	65cm	47cm	13.9mm

植付け年の夏(7月)施行区

植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
68本	67本	99%	57cm	40cm	10.4mm

植付け翌年の春(3月)施行区

植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
130本	122本	94%	60cm	54cm	12.8mm

毎年1回施行区

植付本数	活着本数	活着率	高 さ	枝 張	根 径
79本	74本	94%	57cm	47cm	11.1mm

C 刈拂試験

1. 活 着 率

全刈区に比し條刈の方が僅か高率である.

刈拂の回数が増加するに従つて活着率は低下し, 1回刈区が成績が良好である.

2. 生 長 率

イ, 地力の差も推定されるが, 條刈区より全刈の

方が著しく増大し、1.5倍—1.6倍である。

ロ. 刈拂の回数が多い場合は高さの生長は大であるが、根径枝張は阻止せられている。回数が多い場合は高さは妨げられるが太りや枝張りの均衡のとれた樹型となつている。成績は第3表の通りである。

第 3 表

全 刈					
植付本数	活着本数	活着率	高さ	枝 張	根 径
173本	169本	97%	78cm	45cm	13.3mm
條 刈					
植付本数	活着本数	活着率	高さ	枝 張	根 径
211本	209本	99%	46cm	25cm	6.8mm
年 1 回 区					
植付本数	活着本数	活着率	高さ	枝 張	根 径
172本	170本	99%	71cm	39cm	11.3mm
年 2 回 区					
植付本数	活着本数	活着率	高さ	枝 張	根 径
174本	170本	97%	62cm	46cm	12.3mm
年 3 回 区					
植付本数	活着本数	活着率	高さ	枝 張	根 径
189本	180本	95%	62cm	48cm	12.5mm

D 間 作 試 験

第4表の通り活着は大差がないが、間作区は高さ

枝張根径共大であつて、特に枝張り根径が著しく1.6倍を示している。

第 4 表

間 作 区					
植付本数	活着本数	活着率	高さ	枝 張	根 径
322本	311本	97%	95cm	92cm	24.8mm
対 照 区					
植付本数	活着本数	活着率	高さ	枝 張	根 径
224本	212本	95%	73cm	59cm	15.8mm

E 土地の高低による差異試験

頂上部、中腹部、下部と順次生長は増大している。第5表に示す通りである。

第 5 表

	高さ	枝 張	根 径
頂 上 部	51cm	41cm	10.4mm
中 腹 部	68	56	14.8
下 部	72	61	16.7

5. 結 び

この試験の結果から示された以上の考察は本試験地の地味地勢などの立地条件がかなり異つているし、又予備的な唯一回の結果であるので結論として断定を下し得ないが概説すると、この試験で行つた大部分の方法、肥料、鋤入れ（苗木周囲の耕耘）雑草の刈拂方法及び同回数の増加などによつて幼時の生長をズバ抜けて速進することは出来なかつた。唯山畑に植付けたものは確実に生長を増加し得た。

ユーカリ種子の発芽力について

鹿児島県林業試験場 八 重 倉 優

I 試 験 の 目 的

ユーカリ種子の発芽率は種類と場所により異り、その育苗法も未だ確立されていないので、種類別の発芽力を知り合せて適正な播種量を明らかにするため次のような試験を行つた。

II 供 試 種 子

供試種子の数量が少く、しかも優良、不良種子の判別が困難なため粒数や実重、容積重の調査はできな

つたが、その外観の形状と長径、短径の10粒当の平均を示せば第1表のとおりである。

III 発 芽 試 験

資料種子の中から受精した優良種子と思われるものを選別して吸水紙を敷いたシャレー上に並べ、これを室内の常温下におき、発芽力の試験を試みた。その結果は第2表のとおりである。

第2表より

(1) *E. viminalis*, *E. rostrata*, *E. paniculata*,